館長就任ごあいさつ

館長　海妻（かいつま）　矩彦（のりひこ）

昭和34年、東京大学農学部卒業。岩手大学助手、助教授を経て、昭和58年岩手大学農学部教授。平成6年農学部長、平成8年岩手大学学長。専門は植物育種学。農学博士。

平成14年7月1日から新しく館長に就任いたしました。私は、博物館という人文社会科学や自然科学などを含んだ広い分野にわたる諸活動を任務とする組織に勤務するのは今回が初めてのことです。当初は多少途惑いを感じることもあるかもしれませんが、誠意を尽して館長としての任務遂行に当たり、館員の皆様方と心を一つにして本博物館の発展、ひいては岩手県の発展に全力で取り組む覚悟です。本博物館に係わる皆様方からの幅広いご支援とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

本博物館は県制100年を記念して昭和55年10月に設置されて以来、既に20年を超える長い活動の歴史を持ち、その間に本県における教育や学術文化の発展に多大の貢献を果して参りましたが、今後もこれらの成果を踏まえながら一層の拡充発展を指向して活動を強化して行くつもりです。昨年10月にオープンした県立美術館との連携強化を図りつつ、美術部門以外の部門における活動の強化に努めたいと考えております。

最近は我が国の教育面における諸改革が急速に進みつつあり、生涯学習に対する国民一般の関心も意欲も著しく高まっており、一方では今年度から本格的に開始された学校週五日制の実施や大学制度の大幅な改革が進展しつつあります。このようにして社会全体が大きく変りつつある中で、県立博物館も地域社会における教育活動の重要な拠点の一つとなることが県民各層から従来に増して強く求められております。

本博物館としては、これらを背景とした県民各層から諸々の要請に積極的に応えつつ、一方では21世紀に入って更に一層進歩発展している学術研究の多様化や高度化と高度情報化社会の建設の動きにも適切に対処できるよう、博物館としての組織や体制を整えることが必要であろうと存じます。

そのためには本博物館における諸活動を全面的に点検評価して、本博物館の将来のあるべき姿を明確にし、その理念目標と推進計画を樹立することが最も大切なことと考えております。関係各位の旧に倍する暖かいご支援とご協力を切にお願いし、就任ご挨拶といたします。

■テーマ展

体験！子どもたちの夏休み展

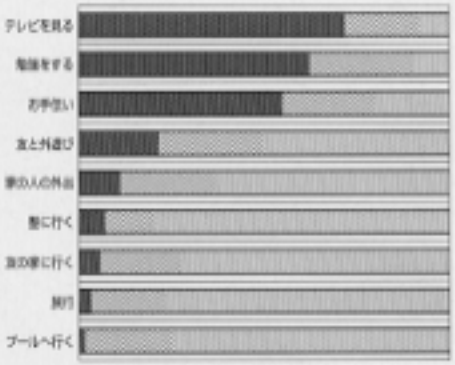
会期　7月30日（火）～8月18日（日）／会場　特別展示室ほか

多くの子どもたちにとって、夏休みは学校の束縛から解放されて自由な時間を満喫できる、きわめて有意義な時間といえるでしょう。学びにおいても遊びにおいても貴重な経験を積み重ね、また「お手伝い」などをつうじて、家庭の一員としての自覚を深める機会にも恵まれます。

この展示会は、子どもたちに、考えながら体験させることが主眼です。加えて、子どもたちの両親や祖父母の時代の遊び道具などから、ひと昔前の夏休みを実感させてみたいと考えています。

1　夏休みに何をしていたか

だいぶ前になりますが、ある調査によると、夏休みの楽しかった思い出として、家族での旅行・キャンプ・友だちと遊ぶこと・プールなどが上位となっています。

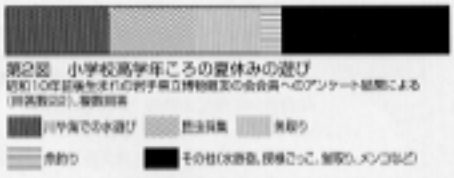


第1図　夏休みの過ごし方
横軸表示1.0は3センチ（平均チマ2.1）以上の行数

毎日の生活では、予想どおりにテレビ漬けになっている様子がうかがえますが、一方で、勉強もそれなりに行われています（第1図）。

この結果について、今の小学生及び小学生の親世代は共感できるのではないかと思います。もちろん、今ほどプールが整備されておらず、川が遊泳場所であったという人も少なくないでしょう。しかし、祖父母世代となると、受け止め方がかなり異なるのではないでしょうか。

予断的な言い方ですが、夏休みに非日常的体験が可能となった親世代以降と、夏休みといっても日常生活の延長にあった祖父母世代という色分けが、当博物館友の会会員に対するアンケート結果からうかがえるような気がします（第2図）。



第2図　小学校高学年ころの夏休みの遊び
昭和10年前後生まれの岩手県立博物館友の会会員へのアンケート結果による（回答数222）、複数回答

夏休みの学習帳「夏休みの友」

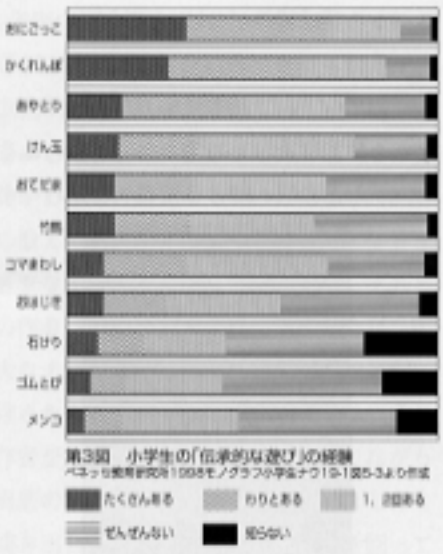
2　思い出としての遊び

祖父母世代の夏休みの遊びは、水遊びや昆虫採集のほか、戦争ごっこや探検ごっこなどといった遊びが流行していたようです。これらは、道具を使わないか、使ったとしても簡易なものです。

高度経済成長期に幼少年期を過ごした親世代となると、遊び道具の種類は激増します。

テレビの登場により、さまざまなテレビヒーローのキャラクター玩具が製作されました。少年漫画も週刊が主流となっていきました。また、野球やボーリングなどのプロスポーツが盛んになり、それらの室内ゲームが開発されました。少ない小遣いを、駄菓子屋の店先で一獲千金ねらいの「くじ」に投資し、一応の満足感を得ていました。

一方、今の子どもたちは室内でコンピューターゲームにばかり興じているように思われますが、一定程度伝承的な遊びを経験していると報告されています（第3図）。よく工夫された素朴な遊びは、流行に左右されずに続けられるのかもしれません。



第3図　小学生の「伝承的な遊び」の経験
ベネッセ教育研究所1998年『ノグラフ小学生ナウ1999-1』図5-3より作成

3　生活の背景

子どもたちの遊びの背後にある家庭生活の基盤も、祖父母世代を経て大きく変わってきました。

三種の神器（白黒テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機）のうち、テレビは子どもたちにもっとも強いインパクトを与えたと考えられます。定時に放送されるテレビ番組は、規則正しいテレビ生活を子どもたちに植え付けました。夏休みの一日の計画には、自由時間という名目のテレビ時間が書き込まれました。

電気洗濯機は、かつて女性のもっとも重い仕事とされていた洗濯を、いともたやすいものに変化させました。母親の生活にゆとりが生み出されたことも、子どもたちにとっては重要なことだったでしょう。

蝿や蚊、蛾などの夏の昆虫たちも屋内で見ることは少なくなりました。蝿取り紙や蚊帳という夏の風物詩も、親世代の夏休みを最後に姿を消していきました。

さらに、上下水道の普及は、子どもたちの仕事を減らしました。風呂たきや水汲み、子守が子どもの日課だった時代も遠くなりました。現在の子どもたちは、台所仕事のごく一部をお手伝いしているに過ぎなくなりました。

ドアに鍵のついた冷蔵庫（昭和40年代）

4　体験をとおして

ところで、当博物館には開館当初から、けん玉やメンコなどの遊びを直接体験したり、機織りや石臼などの道具を試してみたり、甲冑やマタギ服などを試着できる体験学習室が設けられています。

体験学習室は、とくに子どもを対象とした空間ではないのですが、他の展示室とは異なって、いつの場合でも、利用者の過半は未就学児を含む子どもたち及びその親たちです。すなわち、当館入館者の30％を占める子どもたちにとって、博物館が「楽しく」感じるほとんど唯一の空間であったことは疑いありません。

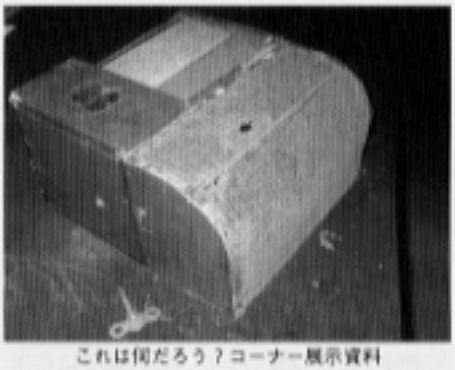
今回の展示では、この体験学習室や体験型教育普及事業の実績を参考としながらも、これらとはまた異なった体験型の空間を演出したいと考えています。

5　楽しく学べるか

これまで当館が実施してきた体験的学習は、わが国の文化伝統に基づく道具や技術、伝承的な遊びに関するものが中心でした。

しかし、子どもたちの日常生活が急激に変化し、かつて親世代や祖父母世代が一時的流行の中で興じた遊びが忘れられてしまっています。このような内容の遊び体験は、親や祖父母に対する理解を確実に深めてくれるでしょう。

同時に、今の子どもたちの視界に入る範囲で、親世代や祖父母世代が使用してきた生活の道具類について、よみがえらせようと考えています。



これは何だろう？コーナー展示資料

また、見る、聞く、試す、考えるなどの観点から、子どもたちの目線でさまざまな資料に接し、触ったり動かしたりしてみることで、楽しく学んでいけるような趣向を凝らしていく予定です。

子どもたちにとって体験がもつ学習効果の重要性は、古くから言われ続けています。しかし、体験の対象そのものが子どもたちにとってどういう意味を持っているのか、博物館が十分な検討を行ってきたとはいいがたい部分もあります。

今回は、子どもたちの最大の関心事「遊び」と「家庭生活」そして「学校生活」の身近な体験をとおして、親や祖父母とのコミュニケーションからなにげなく学び、夏休みについて一歩踏み込んで考える機会として欲しいと考えています。

（主任専門学芸員　佐藤嘉広）

関連事業

- チャレンジ！ラヂオ体操第3（7月31日）
- ゴムプロペラ飛行機をとばそう（8月3日）
- わりばし鉄砲射撃大会（8月9日）　ほか